

17～18世紀インド絨毯の生産、国際流通と その近世日本における受容について

鎌田 由美子

ニューヨーク大学美術研究所 博士課程

メトロポリタン美術館ホイットニー美術史研究員

緒 言

京都祇園祭では、山鉾を飾る懸装品として、国内・海外の染織品を用いてきた（図1）。そのなかには、江戸時代に輸入されたインドとペルシアの絨毯が含まれている。1986年に、メトロポリタン美術館の梶谷宣子氏、ダン・ウォーカー氏、ワシントンのテキスタイル美術館のチャールズ・エリス氏がこれらの絨毯の調査を行い、調査結果は、1992年に『祇園祭山鉾懸装品調査報告書』として出版された¹⁾。その結果、懸装品として用いられてきたインド絨毯（図2）は世界的にみて類例の少ない珍しいタイプとされ、その存在が欧米のイスラーム美術史、染織史の研究者にも知られるようになった。1997年には、ダン・ウォーカー氏によるムガル時代のインド絨毯の研究書において、こうした祇園祭に伝わる特異なタイプのインド絨毯は「京都グループ」と名付けられ、デカン（以下南インド全域を指してこの語を用いる）で制作された可能性が指摘された²⁾。以後、この「京都グ

ループ」と称される、祇園祭に見られるタイプのインド絨毯についての十分な研究はなされていない。しかしながら、京都に残るインド絨毯は、以下の点で重要である。

第一に、絨毯には制作年代が織り込まれることが少なく、制作年代の特定が困難であるが、懸装品には購入文書などが残っているため、このタイプのインド絨毯の制作年代の下限が分かる。そのため、京都にあるインド絨毯は、イスラーム美術史の重要な研究分野である絨毯史の編年に貴重な手がかりを与えることができる。

第二に、このタイプの絨毯が、インドのどこで生産され、世界各地のどこで消費されたか、また、どのような物流に乗って日本に流入したかを考察することにより、インド・ヨーロッパ・日本をつなぐ国際交易の実態の一端を明らかにすることができる。加えて、鎖国していた江戸時代の日本が、いかに密接に当時の国際交易・物流と結びついていたかを具体的に明らかにすることができる。



図1 京都祇園祭



図2 インド絨毯 デカン産 18世紀 京都・北観音山

まず、明らかにすべき問題は、①このタイプの絨毯はインドのどこで、いつ、どのような目的で作られたのか、②類似のものは存在するのか、③どのような国際取引ルートで流通したのか、という点である。以下に、①―③のそれぞれについて調査方法と結果を述べる。

調査方法と結果

①について

京都に残る、「京都グループ」と呼ばれるタイプのインド絨毯の制作地、制作年代、用途を明らかにするにあたり、祇園祭の山鉦町に伝わる懸装品の購入年代、江戸時代の祇園祭のガイドブックである『祇園御霊会細記』における懸装品の記述を調べた。また、17世紀のオランダ絵画に、祇園祭のインド絨毯と酷似する絨毯が描かれていることに着目し、それらがいつの時代に描かれているのかを調べた³⁾。イギリス植民地時代のインドで出版された南インドの絨毯に関する報告書⁴⁾を中心に類似の絨毯について調べた。また、イギリスとオランダ東インド会社の貿易資料から絨毯が貿易品としてどのように扱われていたか調べた。

その結果、祇園祭の懸装品として用いられている「京都グループ」と呼ばれるタイプのインド絨毯は、エロール、マスリパトナムなどのデカン地方で17世紀後半から18世紀に制作され、インド南部東海岸のコロマンデルコーストから、イギリスとオランダの東インド会社によって貿易品として輸出されたものであることが分かった。17世紀半ばから18世紀初めのオランダ風俗画には、「京都グループ」と同種のインド絨毯が、室内装飾品として描かれているが、日本ではそれらが18世紀半ばには祇園祭の懸装品として用いられるようになった。

②について

京都に残るインド絨毯と類似のものを探すにあたり、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（以下V&Aとする）にあるインド絨毯を調査した。なぜならば、京都に残るタイプのインド絨毯がデカンで生産された可能性が指摘されているが、スティーヴン・コーエンが明らかにしたように、V&Aには17～18世紀にデカンで制作されたことが確実なインド絨毯が所蔵されており、比較考察の格好の対象となるからである⁵⁾。さらに、京都のインド絨毯とV&Aにあるデカン絨毯に共通して見られる織と材質の特徴、モチーフなどを、デカン絨毯に見られる特徴として抽出した。そして、19世紀末以降に出版された絨毯に関する研究書・カタログ、世

界各地の美術館の所蔵目録、京都祇園祭以外の祭で用いられている懸装品の図版などを調査し、デカン絨毯の特徴を持っていると思われるものが見つかる実物を調査しに行き、織の構造、材質などに関するデータを取り、撮影をした。また、17世紀前半に北インドで生産されたことが確実な、ガードラー絨毯とフレムリン絨毯も調査した。

その結果、京都にあるインドの絨毯は、北インドの絨毯とはデザインも織の構造も異なるが、V&Aにあるデカンの絨毯とは、織の構造が共通し、多くのモチーフが共通していることが分かった。これにより、京都のインド絨毯がデカンで制作されたことが確実となった。各地で実物を調査したところ、イギリスのマナーハウス、ポルトガル・オーストリア・アメリカの美術館にも京都にあるインド絨毯と同タイプのものであることが分かった。また、滋賀県の長浜曳山祭も同タイプの絨毯を懸装品として使用していることが分かった。現在、北インド、特にラホール産とされる絨毯のなかには、織の構造・デザインからデカン産と考える方が妥当なものが多いことが分かった。

③について

京都にあるインド絨毯がどのような国際取引ルートで流通していたかを明らかにするために、イギリス東インド会社の本国への報告書、オランダ東インド会社の貿易品記録の抜粋一覧 (*Generale Missiven*)、オランダ商館長日記、幕府高官からオランダへの注文書を調べた。

その結果、イギリス東インド会社は17世紀半ばまでには北インド産の絨毯を扱うことに消極的になり、17世紀後半にはペルシア産絨毯を扱うことにも消極的になる一方で、1683年には大量の絨毯を南インドのコロマンデルコーストで購入していることが分かった。オランダ東インド会社は17世紀初めから19世紀にいたるまで、将軍・高官への贈り物、また彼らからの注文品としてペルシア絨毯を輸入していた。同時に、17世紀後半から19世紀初めにかけてデカン産絨毯も日本にもたらしていたことが分かった。

考 察

以上の調査から、京都祇園祭の懸装品として用いられているタイプの絨毯が、17世紀末から19世紀初にかけてデカンで貿易品として生産され、日本のみならず、イギリス、ポルトガル、オーストリア、アメリカにも残っていることが明らかになった。現存例が確認されていな

いが、17世紀後半のオランダ絵画には同種の絨毯が数多く仔細に描きこまれており（図3, 4）、オランダにもたらされていたことは確実である。また、インドのジャイプール宮殿にも類似品が存在することが20世紀初めの写真資料から明らかである。

陶器や茶、チンツ（手描きのインド綿布）が貿易品として大きな重要性を持ち、東インド会社によって世界各地に運ばれたことはよく知られているが、同様に、インド絨毯も貿易品として広範囲に流通していたことが窺われる。「絨毯」というと、その中心的な生産地であるペルシア絨毯を思い浮かべるが、1680年代までにはイギリス東インド会社はペルシア絨毯を貿易品として扱うことに消極的になっている。同時にそのころ、大量のデカン絨毯を注文している。しかしながら、デカン絨毯の多くは、イギリス東インド会社の職員によって私的に、またイギリス人私貿易家によって担われたようである。ポルトガルにもデカン産の絨毯が残っており、コロマンデルコーストにおいてイギリス人と協力関係にあったポルトガル人私貿易家によって、デカンの絨毯がポルトガルにもたらされていたと考えられる。

一方、オランダ東インド会社の場合には、18世紀半ばまで、ペルシア絨毯を貿易品として扱っている記事が

見られる。オランダ商館日記には、19世紀初頭、江戸への土産にしたいという長崎の役人に頼まれて、インド絨毯を手配する様子も描かれている。また、表向きは注文品として長崎の高官等が求めたインド絨毯が、市場に出回っていた様子も浮かび上がってきた。そのようなインド絨毯の多くがデカン産であったと考えられる。

イギリス東インド会社、オランダ東インド会社などは、コロマンデルコースト沿いに商館を設置し、ヨーロッパ、東アジアで大きな需要のあったチンツをその重要な貿易品とした。京都などに残るタイプのデカン絨毯は、エロール、ワランガル、マスリパトナムなどで生産されたと考えられるが、それらの地域とコロマンデルコーストは密接に結びついており、貿易品として取り扱うことが容易であったと思われる。世界各地に現存するデカン絨毯からは、チンツ同様、輸出先の好みに合わせてデザインを変えていた様子がうかがわれる。

結 語

京都祇園祭で懸装品として用いられているインド絨毯にはデカン産のものがあり、それらは17世紀末から18世紀に貿易品として生産された。同様のものが、オランダ絵画に描かれているものの、現存するものが京都



図3 テルボルヒ「化粧室の女性」 1660年ごろ、デトロイト美術館



図4 細部

以外には存在しないと考えられていた。しかし、実際には長浜市、イギリス、ポルトガル、オーストリア、アメリカなどにも同種の絨毯が存在する。それらは、イギリス・オランダ東インド会社によって貿易品・贈答品として、あるいはヨーロッパ人の私貿易家の活動により、世界各地にもたらされた。デカン産絨毯は、ペルシア絨毯や北インド産の絨毯以上に、貿易品として重要性を持っていたと考えられる。

謝 辞

財団法人三島海雲記念財団より研究助成を賜り、おかげさまで、日本と欧米各地で絨毯の調査を行うことができました。京都祇園祭の関係者の方々、各地の美術館の職員、個人コレクターの方にも大変お世話になりました。本研究を支援していただき、深く感謝致しております。

心よりお礼を申し上げます。本研究に関しては、2010年2月にシカゴ大学で、同4月にメトロポリタン美術館で口頭発表しました。詳細については2011年1月に提出予定の博士論文のなかで論じております。

文 献

- 1) 梶谷宣子・吉田孝次郎：『祇園祭山鉦懸装品調査報告書』祇園祭山鉦連合会，1992年。
- 2) Walker, Daniel: *Flowers Underfoot: Indian Carpets of the Mughal Era*. New York, 1997.
- 3) Ydema, Onno: *Carpets and Their Datings in Netherlandish Paintings 1540-1700*. Woodbridge, 1991.
- 4) Harris, Henry: *Monograph on the Carpet Weaving Industry of Southern India*. Madras, 1908.
- 5) Cohen, Steven: "Textiles," in George Michell ed., *Islamic Heritage of the Deccan*, Bombay, 1986, pp. 118-128.